触覚による美術鑑賞の取り組みについて～イタリアの事例から～

The TOUCH ING ART in Italia

武　末　裕　子*
TAKESUE Hiroko

要約：五感の中で最も原始的とみなされてきた感覚は「触覚」である。近年，世界的に掲げられたSDGs目標４「質の高い教育をみんなに」(i) の側面から全国で取り組みが進み，その触覚を切り口とした展覧会や研究が多くみられるようになった。そうした背景や要因にはアクセシビリティをキーワードとした障害理解やインクルーシブ教育が各国の政策として進む現状がある。本論では代表的なイタリアの触れる美術館（アンテロス美術館・オメロ美術館・ドゥォーモ美術館）の鑑賞事例を報告し，今後の日本の美術館における触覚教材活用や普及の可能性について考察するものである。

１．はじめに

美術における身体感覚は「視覚」の果たす役割が大きいと長年思われてきた。しかしながら，近年，インクルーシブ教育と鑑賞教育の高まりから美術鑑賞において「視覚」以外の身体感覚の研究が世界的に深まりつつある。

世界的に掲げられたSDGs目標４「質の高い教育をみんなに」(i) を背景に，日本においてもインクルーシブな環境下での美術鑑賞の重要性が認識され，法整備も進みつつある。特に2016年度の「障害者差別解消法」施行により，教育現場や美術館等の公共施設でのハード面でのアクセシビリティの整備，ソフト面での職員・ボランティアの研修等の促進がなされてきた（2021年からは，国や市町村へ義務付けられていた合理的配慮の提供が，民間事業者にも義務化）。

このような変化の中で，筆者が代表を務める研究グループでは，触覚による鑑賞の実践事例を調査し，研究機関（山梨大学と山梨県立大学他）・美術館・公共施設と協働研究を行ってきた。具体的には，「地域に軸足を置いた世界水準の美術鑑賞ツールの開発」，触れる美術鑑賞「触れることによる美術鑑賞の実践研究（手でみるプロジェクト）」(ii)，「触覚をキーワードとした造形表現の可能性の探求」を目的とした試みである。

筆者自身は，2000年代前半から彫刻分野における「触れる鑑賞」に取り組んできた。その後，イタリアのウフィッツィ美術館・ヴァチカン美術館等でアンテロス美術館（ボローニャ）制作の絵画作品の3D化による立体教材の展示を現地で実見（実触）した際(iii)，視覚障害の有無に関わりなく，多くの来館者が立体教材に触れながら絵画について対話している様子を見ることができ，さまざまな分野に「触れる鑑賞」の可能性を強く印象付けられた。

2018年度からは科学研究費助成を受け，視覚に障害のある人もない人も楽しめる「触れて美術を鑑賞する教材」を地域の施設・教育機関と協働開発することでインクルーシブな鑑賞の場を生み出し，更に盲学校児童達と美術鑑賞を重ねることで，最終的に多様な人に豊かな造形活動・美術鑑賞の力を相互に育むことを目的として事業を展開してきた。

本研究の教材作成協力館にあたる山梨県立美術館は，35年前に当時の教育担当職員であった山本

* 山梨大学　教育実践創成講座

育夫氏（元山梨県立美術館職員・現NPO法人つなぐ 代表）と地域視覚障害者施設の社会福祉法人山梨ライトハウスの協働により，先駆的な触覚教材「手でみるミレー」がつくられ，その後も歴代職員とボランティアの尽力で改良と公開を続けてきた背景がある。

2016年度に前述の山本氏・イタリアアンテロス美術館の研究を日本国内で紹介した大内進氏（当時，独立行政法人特別支援教育総合研究所研究員）の講演会を開催し，そのまとめとして，2016年度には一般参加者の協力による山梨県立美術館の所蔵絵画のレリーフ化を試みている[iv]。

この教材づくりはワークショップ参加者と意見を出し合いながら実施した。具体的には教材に反映する要素について付箋を使って参加者が挙げていき，制作過程で生まれる「版木の彫り音」や描かれている色，素材や情景描写，絵画が描かれた地点の確認等様々なアイディアが出され，「触れる絵画」の教材づくりが始まった。

筆者は彫刻教育・美術教育を専門としているため，造形素材の扱いや調査を反映させた鑑賞教材原形制作が技術的に可能だが，一概に「見えない」「見えにくい」と言っても，先天性の全盲の方・中途失明で全盲の方・見えにくい弱視の方と人により見え方は様々な状態である。触察からイメージを脳内で描くその違いなども教材作りの過程の中で明らかになり，当事者からの意見が必要になっていった。

上記が手探りで進められてきたこともあり，先行研究や国内外の事例に学び，イタリアアンテロス美術館の協力を得ながら実施したのが，2022年度末にまとめをおこなう「手でみるミレーレリーフ版」触覚鑑賞教材である。研究期間内では新型コロナ感染症拡大のために限定的な公開や検証となり，本格的な発展は感染状況をみながら美術館常設展示で展開される予定であるが，研究調査段階の資料をここにまとめ，ツール活用の発展，アクセシビリティの整備促進，教育現場での活用の一助としたい。

図１　ウフィッツィ美術館《ヴィーナスの誕生》の鑑賞ツールはアンテロス美術館が制作している

本研究は「2018-2022年度科学研究費（基盤c）地域連携による触覚鑑賞ツールについての調査・開発研究」（筆者代表）において，彫刻的視点を軸に触覚を用いた美術鑑賞法やその教材等についての調査と協力者との教材開発を並行しておこなったものである。イタリアを中心とした事例調査の近況と現地での教材作成立会い取りまとめを筆者が，国内事例を古屋祥子准教授（山梨県立大学）が担当し，現地での調整立会いを共に担当した。また，先行事例からの助言や見えない・見えにくい人への鑑賞の注意点等を中心に大内 進氏（元国立特別支援教育政策研究所客員研究員）にご助言をいただき，それぞれの専門を活かした協力を行なってきた。研究内では国内外の多くの施設を調査したが，本稿では現地で説明いただいた（写真撮影は全て筆者らによる）イタリアの事例を中心に以下に記す。

２．イタリアの触覚鑑賞の美術館

（１）アンテロス美術館（ボローニャ Museo Tattile ANTEROS - Istituto Cavazza）

所在地：Via Castiglione, 71, 40124 Bologna BO, Italia

（ガイド・教育普及対応が含まれるため要事前予約https://www.cavazza.it/it/museoanteros）

アンテロス美術館（ボローニャ・イタリアMuseo Tattile ANTEROS - Istituto Cavazza）はヴァチカン美術館やウフィッチ美術館（**図１**）の名だたる美術館に触覚鑑賞教材を提供している。絵画からデジタル・アナログの両技術を用いて忠実にレリーフ化を行い，視覚に障害のある鑑賞者にも分かりやすい美術鑑賞法を提示し，研究に特化している美術館である。2017年にも本研究に関連してメソッ

ド発案者であるロレッタ・セッキ氏と専門の彫刻家パオロ・グアランディ氏に講演とレリーフ化の実演をしていただき，ツール作成手法や鑑賞法を学んできた。

図２　アンテロス美術館の外観
ボローニャ中心地の歴史的地区

アンテロス美術館は1999年にボローニャに設立（**図２**）され，1995年の応用彫刻協会でのプロジェクトがベースにあり，サントルソラ病院・イタリア盲人連合・自治体等の協力を得て，フランチェスコ・カバッツァ盲人福祉施設が施設母体となっている。コレクション構想にあたっては，芸術理論，触覚と視覚の心理学，芸術の歴史と教育学，類型学，応用彫刻の専門家チームで設計作成がなされており，古典・ルネッサンス・現代までの主にイタリアの著名な絵画のレリーフ翻訳でコレクションは構成されている。近年は，国外からの美術館からの協力依頼に応じて制作が行われ，ドイツ・日本など海外の画題にも取り組んできた。現在は，遠近法の理解に役立つ資料など40点以上の資料が公開されており，それらは常に作品についての情報や描かれている内容，また歴史的芸術的解説も付随させることにより，その絵画に込められた意図や文化的な背景にまで鑑賞者を導くように解説がなされている。美術館内では絵画の写真・情報と解説の墨字・拡大文字・点字が１セットになり，レリーフの前に置かれ，ロレッタ・セッキ氏や解説に特化した職員や協力者により，鑑賞者の見え方や原因・経験の違いに応じてプログラムを組まれている（**図３**）。

彫刻家は専門家の助言とデジタルデータ情報をもとに，粘土によるレリーフ化を行い，制作段階から見えない・見えにくい検証者の助言を反映させながら原型作成に取り組む（**図４**）。彫刻技法的な面では前景と背景の間に手の入り込む彫り込みを設ける等，見えない・見えにくい人へのわかりやすさの工夫や描かれている情景の精査などが見られる（**図５**）。また，ロレッタ・セッキ氏はアドルフ・フオン・ヒルデブランドの『“Il problema della della forma” 形の問題』の中の触覚体験から得られる部分と全体の視覚的イメージの構築や，パノフスキーの３段階の読み取り手法ついて記し，美術館内では粘土による造形と触覚による鑑賞を組み合わせのワークショップなどを実施し，触覚から得られるイメージの構築が脳内の視覚野へ働きかける相互作用についても研究と普及を行っている（**図６**）。

図３　アンテロス美術館展示室　的確な手順で解説をするロレッタ・セッキ博士と資料の数々

図４　アンテロス美術館作業室　2016年に彫刻家ステファノ・マンゾッティ氏に薄肉レリーフの作成技法についてお話しいただいた様子

前述のように高水準の彫刻技量と視覚に障害のある鑑賞者へのアプローチに特化した鑑賞法研究は他に類を見ず，筆者の研究グループは協議の末，35年前に発案された山梨県立美術館の鑑賞教材「手でみるミレー」にレリーフ教材化にあたって共同研究を依頼した。

また，当初は最終年度を2020年度パラリンピックの時期に予定されていたが，新型コロナ感染症拡大のため約２年寄贈が延期され，2022年９月末に山梨県立美術館に研修会開催とともに研究資料とツールを寄贈，2022年度末に常設設置で一般公開予定である。教材の作成・鑑賞法・活用を含めた詳細は2022年度末に報告書を予定している（**図７**）。

図５　アンテロス美術館展示室の肖像作品からは、手前の人物と背景の間に手の入り込む空間を設け、触覚で伝える教材作成の工夫が見られる

図６　見えない人の希望者は教材鑑賞後，粘土によるワークショップにも参加できる

図７　新規連携教材の鑑賞手順や効果についてセッキ氏に教授いただく様子

（２）国立オメロ美術館（通称『オメロ博物館』）

所在地：Mole Vanvitelliana, Banchina Giovanni da Chio, 28, 60100 Ancona AN, Itaria

（視覚に障害のある方に細かな解説を希望する際は要予約であるが，国立として一般に広く公開されている。https://www.museoomero.it/）

前述の「手でみるプロジェクト」の一環として，2018年12月にアルド・グラッシーニ氏（発案者・代表），アナリザ・トラサッティ氏（学芸員）を山梨県立美術館を会場として招聘し，ご講演いただいた。

国立オメロ美術館は，全ての作品に触れることができるイタリア国立であり，全館バリアフリーで全ての来館者が触覚による芸術鑑賞を行うことができる。

イタリア盲人連盟の提案を受けたイタリア共和国マルケ州の支援によって，1993年アンコーナ市でオメロ博物館は開館し，1999年11月25日法第452号により国会で国立美術館として認証された。美術館の目的は，上記法第２条に記載されているように「視覚障がい者の文化的統合と成長を支援し，視覚障がい者の間で現実の知識を深める」ことであり，講演会でも「全ての人々にとって好ましく生産的な文化空間でありたいと願い，個々の来館者の特定な要望に対応する柔軟性のある行程を備えた前衛的な場であるよう提案し続ける」と代表のアルド・グラッシーニ氏と職員のアナリザ・トラサッティ氏から具体例を元に語られた。

2012年，アンコーナ市“ヴァンヴィテッリアーナ郭”に開館（**図８**）。４階建て3000平米の敷地の館内には資料研究センター・学習ラボ・事務所・会議室・特別展やイベント向け展示空間が設けられ，2014年12月23日よりイタリア文化遺産省のマルケ州美術博物館連合の一部として運営されている。

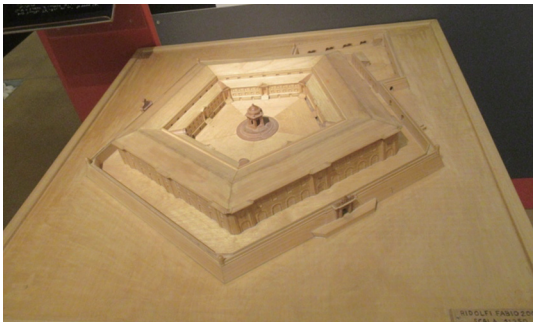

図８　港の検疫所であった歴史的な建物の中にあり、展示室入り口では特徴的な形を建築模型から触察できるように配置されている

図９　展示室入り口，回廊を活かした空間に展示されており，古代彫刻から年代を追って触覚鑑賞を進めることができる

図10　作品鑑賞時にぶつからない距離で，展示解説やキャプションが壁付けされている（2018年の様子）

また，2017年にはコレクション全体，特に考古学に関して，３階と４階に配置され，200点以上の古典的代表作品の樹脂や石膏レプリカ，建築学的模型・オリジナルの現代彫刻（ジュリアーノ・ヴァンジ，ジョルジョ・デ・キリコ，アウトゥーロ・マルティーニ，マリノ・マリーニ他）を観覧することができた（**図９・10**）。作品展示は現代作家達の賛同により増え，合計で300点にはなる展示品をさまざまな感覚を用いて鑑賞できるように常設している。2021年には“Tod’s”というグループ企業が協賛提供するMade in Italyデザイン作品（イタリア製品デザイン部門）を，博物館の展示方法と理念に準じて展示新設し公開している。

図11　訪問時に粘土ワークショップの様子を説明いただいた，白土のなめらかなレリーフ作品が並ぶ

加えて教育的な役割も果たしており，2018年８月20日からオメロ博物館は，イタリア文化大学研究省大臣令2016年第170号に基づく教員研修を目的とし，同省研修育成教育システム局学校教育人事総務部の基準を満たした法人として認定されてもいる。

研究期間中の2018年春同美術館を訪れた際には，グラッシーニ氏による触れて彫刻を鑑賞する実演を受けた。2018年冬には，同氏を日本（山梨）へ招聘し講演会を実施（平成30年度　文化庁助成大学における文化芸術推進事業助成（山梨大学採択）　地域アートマネージメントにおけるアウトリーチ・ワークショップ『手でみる』プロジェクト講演会）している。

2019年に共同研究者である古屋祥子准教授（山梨県立大学）と訪問した際には，教育普及担当の学芸員からも美術館内の教育普及活動の様子をご説明いただいた（**図11・12・13**）。

また同館では，コロナ禍以降ラジオ・映像・音声解説による取り組みも増え，HPでは随時世界へ発信を続けている[vi]。2021年12月開始のデザイン部門の紹介を含む教育普及用の「Proposte Educativo」ガイドブックでは，ミュージアムとデザイン32セクションの両面から以下の様々なワークショップ案内が団体・グループ用に用意され，対象ごとの教育的なねらいも記されている。

図12　訪問時に地元小学校の粘土ワークショップの様子を説明いただいた，赤土の素焼き，電気窯が館内にある

〇デザイン部門の提案

・学校への提案（デザインの物語について鑑賞）

・小学校への提案：デザイン作品の金型や石膏や液体粘土によるワークショップ（２時間）

・中等学校への提案：デザイン作品を調べ，フォルム・素材・表面・機能などから手と目の関係について考えるワークショップ（１時間30分）

〇美術館部門の提案

・触覚鑑賞解説

・幼稚園等への提案：触る絵本（**図14・15**）を通して彫刻について考え，粘土造形を体験（架空の動物の絵本や彫刻などを通して，硬さや柔らかさ，荒さやなめらかへの注意を投げかける）

・小学校への提案：触る絵本と点字コード，様々な素材による触覚絵本作りのワークショップ等（２時間）

・肖像作品について考える：歴史の肖像作品（ホメロスから抽象的なキリコ作品まで）に込められた感情や表現につ

図13　訪問時に親子ワークショップの作品について説明いただいた，レリーフ状の白土作品で乾燥途中

いて推察・理解し，鑑賞後に粘土による肖像造形を体験する（２時間）

・美術館について考える：驚異や彫刻の畏怖の念をテーマとしてコレクション作品を中心に作品に触れ，触れる絵本などを通して考える。具体的なテーマとしては「この美術館はどのようにして生まれたか」，「なぜオメロと名付けられたのか」，「ミケランジェロのダビデの物語の背景とは」など（１時間）。

図 14　ワークショップで活用されているという触る絵本の数々

上記の小学校への提案では，ねらいとして「芸術教育，物語と聞き取りによる教育，触覚感覚を高める，表現の創造性と感覚の表現，イメージの変換と比喩的素材表現」などがそれぞれの項目ごとに挙げられている。

図 15　マグネットが込められている触る絵本もあり、工夫が見られる

（３）ドゥオーモ美術館 Museo dell'Opera del Duomo
（Piazza del Duomo, 9, 50122 Firenze FI,）

ドゥオーモ美術館はフィレンツェの中心街にあり，ルネッサンスの記念碑的作品が多く見られる。ルネッサンス1891年に設立され，2015年に大幅改築された。建築的および美術作品の保存も目的にレプリカを公開し，美術館で本来の作品を保護しながら公開している。

6,000平方メートルの面積が28の部屋に分割され，３つのフロアに分かれている。博物館を部分的に改装し，新しい部屋を設置，ルネサンスの発祥地であるこの博物館では信仰・芸術・歴史について凝縮して展示されている。

ミケランジェロからドナテッロ，ブルネレスキ，ギベルティ，ルカ・デラ・ロッヴィアその他無数のモニュメントまで，7世紀にわたってモニュメントを飾ってきたオリジナルの傑作が保存されている。

2016年から「Touch Able」と名付けられた取り組みにより，組織的に実施され，事前予約で訪問者の特性やニーズ合わせた鑑賞が可能となるように案内されている（**図16**）。

触図マップや点字ガイド，拡大テキスト，木製モデル，多数の作品複製の触るためのコーナーが館内の実物作品の近くに点在している。また，それらの教材にはイタリア語・英語の解説も併設されている。

展示室ガイドは大きく21のセクションで分かれており，各自のスマートホンで各室の無料ガイドアプリ「Museo Duomo」のQRコード読み取りにより手元で聞くことができる。HPでも「projetti per l'accesibilita」としてフロアごとの作品とその解説を見ることができる。読み上げ機能を活用すれば音声で聞くこともできるため，視覚に障がいのある人にも詳細な情報収集が可能となる[vii]。

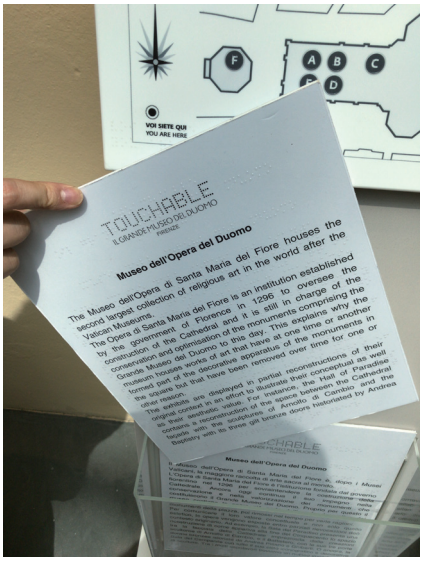

図 16　TOUCHABLE と名付けられたプロジェクトで取り組まれている，入り口のマップと解説

また，ロレンツォ・ギベルティ Lorenzo Giverti によって原型制作された礼拝堂の《天国の扉》（1425-1452）のブロンズレプリカ（**図17**），大聖堂の14世紀のファサードの再建のタッチパネル等，

レプリカには樹脂が多く用いられているのも特徴である。ドナテッロの《マグダラのマリア》木彫レプリカでは木彫のように見える樹脂を用い，ルカ・デッラ・ロッビアによるトランペット奏者のレリーフレプリカ（**図18**）でも大理石調樹脂が用いられている。

ミケランジェロMichelangelo Buonarrotiのピエタ《Pieta di Bandini》（**図19・20**）（1547-1555 ca.）のキリストは2タイプの教材が用意されており，作品上部と全体をそれぞれ鑑賞することが可能となっている。そのほかにも大聖堂の19世紀のファサードの教材などがある。

コロナ禍の2022年9月現在，2017年訪問時に公開されていた一部の触れる作品は事前予約により視覚に障がいのある鑑賞者を対象に公開し，アクセシビリティコーナー利用時にはマスク着用・手指消毒・検温箇所通過を義務付けられていると公開情報に記述がある。状況に応じてではあるが，求める鑑賞者へのアクセシビリティの取り組みは継続して行われている様子である。（使用写真筆者撮影：Courtesy of Opera di Santa Maria del Fiore）

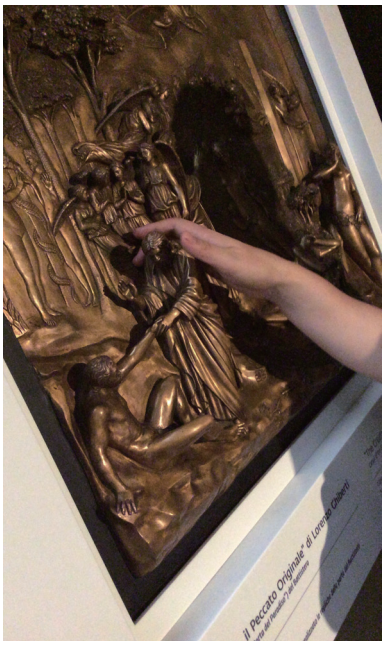

図17　ロレンツォ・ギベルティ作品のレプリカ

3．まとめ

新型コロナ感染症により，以前より触れることへのタブー視が強まったように感じる時期もあったが，2022年の現在では，逆に対象を子どもや視覚に障害のある方と限定し，事前予約を取り公開している美術館が見られるようになってきた。

今回調査を行った美術館には数回に分けて訪問し，少しずつ情報を集めたが，特に感染症が拡大してからは柔軟な手法で美術へのアクセシビィリティの機会を増やしていこうという取り組みが多く見られたように感じている。中でもオメロ美術館は国立であり研修役割を果たす位置にあるためか，動画配信やオンラインラジオ配信が充実している様子であった。それぞれの美術館でコロナ禍なりの発信がなされており，情況を見ながらではあるが，求める鑑賞者への継続的な働きかけが何より必要であるように感じた。

図18　ルカ・デラ・ロッヴィア作品のレプリカ

また，2022年度に山梨県立美術館へ寄贈がなされた筆者の関わるプロジェクト教材もまた，多くの求める鑑賞者に活用いただけることを願っている。特に，見えない・見えにくい人とともに多くの子どもや学校でも気軽に美術作品に親しむきっかけとして活用いただけるように今後も調査し考えていきたい。

［謝辞］

本稿執筆にあたり，調査プレジェクトを応援してくださった調査美術館（アンテロス美術館フェルナンド・トレンテ氏（代表），アロレッタ・セッキ氏　（キュレーター・館長），パオロ・グアランディ氏　（彫刻家），ステェファノ・マンゾッティ氏（彫刻家），エンリコ・スキッル氏（彫刻家）ミケーレ・ピッコロ氏（美術館ガイド），マッテオ・ステェーファニ氏（ボランティア触察ガイド）・ルカ・トッレンテ氏（現地撮影・公開映像編集）・オメロ美術館　アルド・グラッシーニ氏（発

案者・代表），アナリザ・トラサッティ氏（キュレーター），マヌエラ・アレッサンドリーニ（教育普及），ドゥォーモ美術館バーバラ・フェデッリ）へ心より感謝致します。本稿に詳細を記すことができなかったのですが共同研究者の山梨県大学古屋祥子准教授，星美短期大学客員究員大内進先生，通訳・翻訳にご協力いただいた森泉文美先生，フランチェスカ・レアーレ氏をはじめ，ご協力いただきました多くの方々に心より感謝申し上げます。

図19　ミケランジェロ作品のレプリカ（実寸上部）

［付記］

本論文は科学研究費助成基盤研究（C）「地域連携による触覚鑑賞ツールについての調査・開発研究」（18K00232）及び，文化庁助成平成29・30年度「大学を活用した芸術文化推進事業」による。学内外の多くの支援を受け続けることができた。詳細は註１。

図20　ミケランジェロ作品のレプリカ（縮小全体）

［文献・註］

ⅰ 国 連 HP https://www.un.org/sustainabledevelopment/sustainable-development-goals/,（最終閲覧　2022年11月９日）

ⅱ「手でみる展覧会・プロジェクト」は視覚に障害のある人も無い人も楽しめる触覚を頼りとした美術鑑賞の取り組み。2012年山梨大学教育人間科学域戦略プロジェクト助成「触覚を手がかりとする彫刻鑑賞法の普及と新たな可能性」で筆者の取りまとめた「触れる彫刻素材」題材開発を元に2013年より同大学助成を受け「手でみる彫刻展」を開催したことを始まりとする。加えて，翌年2014年から第２筆者の山梨県立大学「文部科学省『地（知）の拠点』事業」助成，2015年は山梨県立美術館の企画「感じるかたち」展として開催。2016年は山梨大学単独開催で文化庁助成採択事業文化庁助成平成29・30年度「大学を活用した芸術文化推進事業」として講演会・ワークショップを中心に開催。2017・2018年は文化庁助成継続採択，2018年から科学研究費助成基盤研究（C）「地域連携による触覚鑑賞ツールについての調査・開発研究」（18K00232）及び，山梨県立大学内助成を受け共同開催，2019年山梨県立図書館が共催に加わり地域に根付き継続した取り組みを行ってきた。

ⅲ 科学研究費助成事業基盤（B）「日伊の交流を通じたロストワックスブロンズ彫刻の新たな表現の研究」（15H03173），中村義孝（代表）・宮崎甲・松尾大介・外舘和子・田中修司・田中佐和子・武末裕子，イタリアはインクルーシブな（障害の有無にかかわらず共に学び進める）取り組みを法律で定め実施している国であり，アンテロス美術館（制作による絵画作品の3D化は3Dプリンター技術が進む中でも，再現性や情報の精査の面でも彫刻的な量や面への視点・技量を要する研究分野でもある。

アンテロス美術館　ＨＰ https://www.cavazza.it/it/museoanteros（最終閲覧　2022年11月９日）

ⅳ 2016年度実施講演会　2017年２月12日（日）開催『手でみるミレーのこれまでとこれから』講演：山本育夫氏（NPO法人 つなぐ 代表）企画：山梨大学（武末裕子）司会：山梨大学学生共催・会場：

山梨県立美術館助成：平成27年度文化庁助成「大を活用したアートマネージメント育成事業」（山梨大学）　開催の中で（2022年９月30日山梨県立美術館でのボランティア研修会配布資料より部分
「ただつくりながら，僕の中にいろいろな疑問が湧いてきました。『確かに平面的な絵画を線で置き換えるという方法を見ても，絵画の体験になるのだろうか，これと絵とは違うものではないか。』疑問化されたわけです。ライトハウスの署長さんとこういうものが必要なのだろうかと挫折しそうになった時に，『そんなことは言わないでください。少なくとも，美術館がこのようなツールを作っていくことはなかった。（その当時）こういうものがあれば，それを理由に美術館に来やすくなるのですよ。』ということなのですね。
（見えない方にとっては）そうでなくても美術館に行きづらかった，「何しに行くの？」ということになるわけです。先ほど武末先生がおしゃってましたけれども，『全部が分かるわけじゃない，でも何かきっかけになるかもしれない。』そしてそれが，障害のあるの人たちにとって，得ることがある可能性もある。」
講演内容により，開発者の経験談が次のツール作成のきっかけとなった。
ｖ　詳細は『イタリアのフルインクルーシブ教育―障害児の学校を無くした教育の歴史・課題・理念』，著者アントネッロ・ムーラ・監修：大内進・翻訳：大内紀彦，2021　を参照されたい
vi 国立オメロ触覚博物館　ＨＰ https://www.museoomero.it/wp-content/uploads/2022/09/proposte-educative-22-23-museo-omero.pdf（最終閲覧　2022年11月9日）
vii ドゥオーモ美術館　ＨＰ https://duomo.firenze.it/it/home（最終閲覧　2022年11月９日）